

死相

一九八八年秋、アフガン人チームの再組織化のため、私は一時的に病棟を離れていた。その直後、サタールは高熱で倒れた。私が診に行った時、明らかに腸チフスであったが、その後急激に衰弱し、敗血症、さらに急性粟粒結核を患った。私の代わりにミツシヨン病院の内科の医師が診ていたが、長引く治療に耐えきれず、怒って退院してしまった。というより、自分の判断で「臨終」を決め込んでしまったのだ。

一徹物のサタールは、不誠実なパキスタン人の医者と病院をのろい、死を決意した。私が三週間たって彼の家を訪れたときは、本当に虫の息だった。聴診器を忘れてきたので、自分の耳を彼の背中につけて聴くと、ひどい喘鳴が聞こえ、高熱で耳が熱く感じた。しかし、衰弱しきった状態にもかかわらず、彼の体温が何かたぎるような彼の意志を生々しく私の耳に伝えるようであった。一緒についてきたアフガン人の医師が言った。

「死相がでています。このような患者を私は何人も診ました。もう諦めるべきです。彼らの意志を変える事は不可能です。」

しかし、私はこの患者への愛情を捨て切れないと同時に、残される家族一妻と四人の子供達の事を思えば、いたたまれなかった。死亡する前にと、急いでミツシヨン病院からの年金の手続きを済ませ、ともかく指示された結核の薬と、日に2リットルのスープは無理にでも飲むように命令した。

「お前は潔いつもりだろうが、そうはいかん。後に残される者のことも考えてみる。お前の命はアッラー（神）のものだ。お前自身で判断はつかぬ。恰好をつけるな。恥をさらして生きなやかんこともある。」

「ドクター・サープ、分かりました。おっしゃる通りにします。ただ、病院には死んでも帰りません。家族と一緒に居させて下さい。」



横では、もう一人の病人が狭く暗い部屋の中に横たわっていた。彼の妻で、まだ四十歳前であったが、青白く痩せこけて激しく咳きこんでいた。十歳前後の女の子がその背中をさすっていた。彼女も肺結核で、最近治療を始めたばかりであった。他の五、六歳の子供達は姉の手伝いをして、水運びや両親の世話で忙しそうであった。

ほとんど絶望的な気持ちで私は外に出た。暗い家の中と対照に、明るい青空と強烈な日差しが目についた。埃の舞う路地では、近所の子供達が何事もないように群れて、笑顔に溢れて楽しそうに遊んでいた。粗末な泥の家並みを背景に駐車している、日本から送られてきた真新しいジープが、妙に不釣り合いで白々しかった。

大通りに出ると、折から戒厳令解除後初の総選挙の直後で、街は騒然としていた。人民党の赤・黒・緑の三色旗と赤旗が街路を埋め尽くし、人民党の圧勝と「自由とデモクラシーの到来」をスピーカーが喧しくがなりたてていた。しかし、勝利を告げる人民党の三色旗も、イスラム平等主義のスローガンも、パキスタン建国の理想も、ヒューマニズムも、パシトゥン民族主義も、いかなる政治的宣伝も、今の我々には余りに無縁なものであった。そして、日本がいよいよ遠く遙かに感ぜられた。

